

# ひとりで遊ぶとき、一緒に遊ぶとき

牛山 佐智恵

九月、雨あがりの庭で、三歳のIが機嫌よく砂いじりをしていました。そばには、角柱状に組み立てたブロックが立ててありました。

Iは砂をかき集めると、そのブロックの中へどんどんつめこんでいきました。それから側面のブロックを一つはずしてみました。砂はほどよく湿っていて、側面にあけた口からしぼり出されるように出てきました。

Iはブロックの中に残っている砂をもっと出したいらしく、砂をかき集めては投げこむように中に入れていきました。しかし思うように出ないことに気づいたのか、しばらくすると、先ほどはずした側面のブロックを元どおりにはめて、砂の出口をふさぎました。それからまたどんどん砂を入れていき、十分に砂が入ったことを確かめると、側面のブロックを一つはずして、砂の出口を作ってみることを繰り返しました。

Iの生まれは年少組でも一番最後、友だちの中で遊ぶよりは大人のそばにいたい毎日でした。いつもなら私を見つけると大声で呼びとめ、一緒に過ごすことを求めるのですが、このときのIは、通りがかりに足をとめた私をちょっと見ただけで、自分の遊びを続けました。

十一月はじめ、Iが一リットル入りの空の牛乳バックを持って近づいてきました。見るとその側面にはコの字形の切り込みが入っていて、ちょうどドアのように開け閉めできます。

ふたりで連れだって庭に出ると、Iはさっそくその牛乳バックの中に砂を入れ始めました。側面のドアのような口を手で押さえて砂を入れ、それからおもむろにドアをあけてみました。

私はIが二ヶ月前と同じ遊びをしていることに気づきました。ひとりで、さもおもしろそうに繰り返しやっているのも同じでした。その顔には、自分のおもわくどおりに事が運んでいく余裕のようなものも見えました。

そんなIを見て、私は、ひとりで遊べるということと自分を確認していくことが重なりをもったもののように思いました。砂を入れたという自分の行為を、Iは砂が出てくるという形で確かめ納得しています。自分のやったことが、形を変えてより鮮明に確認できるとき、そこには自分の力が広がり強まっていくようなおもしろみがあるように思えます。

「Iにとって大勢の子どもたちに囲まれて暮らす毎日は、納得のいかないことの数多い日々でしょう。そんなIが、いわば自分をたくわえていくようなひとりの時をもっているのを目にして、私はIがもう友だちの中でも遊んでいけると感じました。そして、友だちを求めたり友だちに応じたりすることができだすときこそ、こうしたひとりの時間がこれまでに以上に大事なものであるのだろうと思いました。私には、Iの表情にあった余裕のようなものが、この子が自分を支えていく糧となるような気がしました。」

牛乳パックでの砂遊びから数日後、Iが「やっこさん作ろう」と言ってやってきました。

半月ほど前から、Iは時々私に「やっこさん作って」と頼み、いくつも折ってもらっては家に持ち帰っていました。ですからこの日、Iが「やっこさん作ろう」と言ったのにはちょっと驚きました。さっそく二枚の折紙を用意して、私が折るとIが折るというぐあい、ふたりでやっこさん作りを始めました。

それぞれ一つ目を折りあげたとき、Iは「今度は一緒に作ろう」と言います。私はどうやったら一緒に一つのものが折れるのかと一瞬迷いましたが、とりあえず折紙を一枚取りだし、ふたりの間に置きました。

ところが折り始めてみると、なるほど一緒に折ることができます。折紙の中心に向かって、私が一角を折ると向かいの角をIが折る——ふたりの折った紙先は中心点で触れ合うことになります。

考えてみれば、確かにやっこさんは対称形に折っていく繰り返しでできあがります。I はふたつの紙先が出会う度に、目を細めました。ちょうどおじぎをしあって挨拶を交わしているようなおかしさに、私はこんな折り紙の楽しみ方もあったのかと驚いていました。そんなとき、I がひとり言のように口ずさみました。

「いっしょにつくるの いいきもち

いっしょにねるのは いいきもち」

I の「きもち」は、はずむような調子となって語られました。その口からこぼれるように出た歌に合わせて、私も一緒に歌い、一緒に折っていききました。

「いっしょにつくるの いいきもち

いっしょにねるのは いいきもち」



一緒に遊ぶこと、一緒に同じ時を過ごしていることが、互いの心をあたためていくさまを、Iはそっくり歌ったように思います。

「あつ、お帰りだ」と急いで立ち去るIを見送りながら、私はほんとうにIと一緒に遊べたという気持ちになりました。最初はIにつき合うつもりで始めた折り紙でしたが、いつのまにか私も楽しんでいました。そして最後は、Iにすれば思わず口をついて出た歌を思いのほか喜んだ私に、Iの方がつき合ってくれていたのかもしれない。それぞれに相手求め、相手に応じたことが、つき合うことを越えて一緒に時をつくったのだと思います。

Iが「いっしょ」を「いいきもち」と口ずさんだのも、大人と過ごすときのゆったりした気分を、この子がこのとき、かなりはつきり意識していたからでしょう。それは「一緒に作ろう」と誘いかけ、その言葉どおりに遊べたことから生まれたものだと思います。そこにはやはり、ひとりで遊ぶときのIに見た余裕のようなものが感じられます。ひとりで遊ぶことと一緒に遊ぶことが、バラバラのものではないことを考えさせられたひとときでした。

(長野幼稚園)